

みにて、いはゆる序枕詞のたぐひにぞ有ける。

〔類聚名物考 地理十二〕背山 せのやま

妹背山をも、いも山といへり、紀伊吉野の界に在りといへり、又増基の熊野紀行を見れば、玄、のせ山といふを、せの山とのみよめり、是は別山歟、又妹背山のせ山にや、妹背山の所在たしかならず、貝原氏の大和めぐりにも、此山の事を書り、その外古書に合せて考ふるに、さだかならず、再考をまつのみ、増基熊野紀行、玄、のせ山に寐たる夜、鹿の啼を聞いて、うかれけんつまのゆかりにせの山の名を尋ねてや鹿のなくらん、今案に、此紀行に、前に吹上の濱にとまり、その次此山に舍りて、この次に岩代野に宿りしを思へば、吹上と岩代の間に在りとしられたり、

〔紀伊國名所圖會三編二〕妹妹山モモセ妹伏山モモハは澀田村モモタにあり、今長者屋敷といふ、妹山モモヤマは背山村モモヤマにあり、今伊都郡モモヤマ鉢伏山モモハといふ、紀川を隔て、相對せり、或說に、大和國に妹妹山モモモモヤマあり、今甚誤なり。

兩山の際大に迫りて、たゞ一條の流れを通す、孝德天皇詔して爰を邦畿の南限と定給ふ兄山は狭き山の義にして、地形より起れる名なるべきを、史に兄山と書るは假字なるべしむかじは此山背を越るを南海道とし、牟婁津明光浦などに行幸の時々も、これを越え給ふ、其比狹を妹の義にとりなし、是に對せる川南の山を妹山と稱し、どうぐ風詠せしによりて、妹妹山の名普く天下に聞えたり、いづれの世にかあらん、此わたりに雛子長者といへる富豪の者ありけり、妹山のかたちなだらかにして、風景よきを賞し、山上を平らして玉樓を構へ、絲竹管絃の遊びをなしければ、いつとなく長者屋敷とよびなして、遂に妹山の名を失ひ、妹山もまた山足をきり開きて、今之官道とせしより、妹妹の姿大に移轉れりとぞ、或云、妹妹山モモモモヤマといふ、併優に、雛鳥といふ姫、妹山ふに本づけるものならんとぞ、

〔日本書紀孝德二十五〕大化二年正月、凡畿内東自名墾横河以來、南自紀伊兄山以來、足此云制、西自赤石櫛淵